

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主論文の要旨

論文題目 マレーシア語と日本語の対照会話研究
— あいづちとその出現環境を中心に —
氏名 勝田 順子

論文内容の要旨

本研究は、会話・談話分析の知見が非常に限られているマレーシア語会話と、日本語会話の対照分析、及び日本語接触場面会話の分析を、主に聞き手の反応（あいづち、うなずき）の観点から、質的・量的に行なうものである。

日本人の会話においては、他言語話者のそれと比較して、あいづちが頻繁に打たれることが対照談話研究の分野で広く認知されている。その要因として、日本の文化観（「和」、「思いやり」）（White 1989, Maynard 1997 他）や、日本語の統語構造（あいづちを入れる機会が多い）（White 1989, Fox, Hayashi and Jaspersen 1996, Maynard 1997, Cutrone 2005 他）に帰する説明がなされてきている。しかし、それらは実証的分析に基づいたものというよりは、むしろ印象的に述べられるにとどまっている。また、あいづちに関する研究は 1980～1990 年代に生産的に行なわれたが、量的分析が主流であり、質的分析が十分になされてきたとは言いがたい。

一方で、口語マレーシア語の研究は散見されるものの、その数は決して多くない（*kan* の談話的機能について述べた Wouk 1998, 1999, 2001; 多義語-*nya* の意味、文法化の経路の仮説を提案した Englebreston 2007; Yap 2011 他）。そもそも、マレーシア語会話の分析（談話分析、会話分析）自体、非常に限られている。

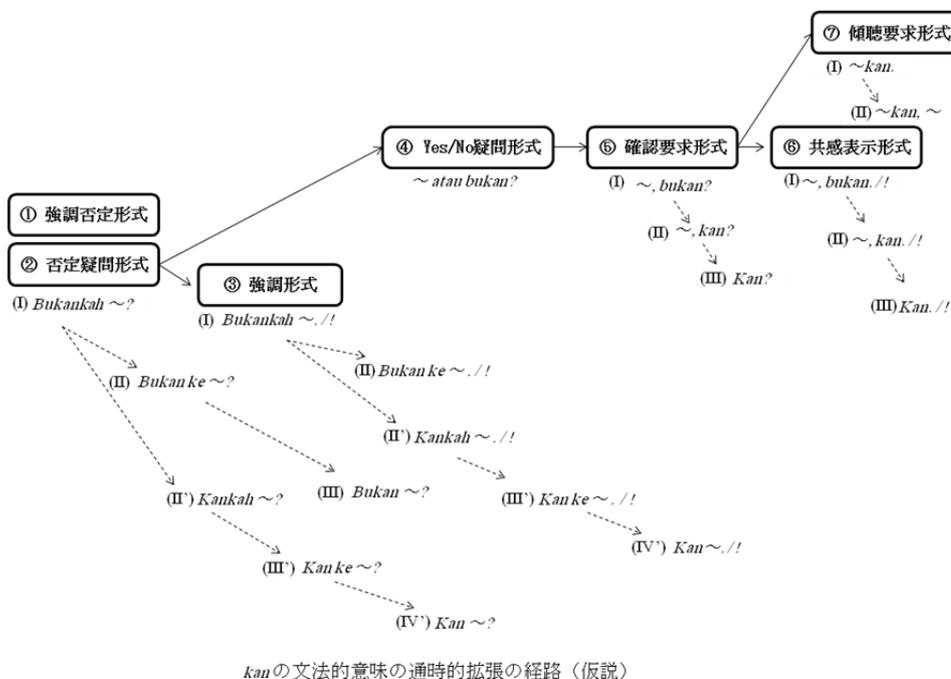
よって、マレーシア語と日本語の対照会話分析、及び日本語接触場面会話の分析によって得られた、聞き手の言語・非言語行動の質・量的分析結果は、マレーシア語会話の談話・会話分析研究への貢献、及びマレーシア語母語話者への日本語教育への応用可能性といった意義があると考えられる。更に、日本語会話における聞き手の言語・非言語行動の質的分析によって、先行研究の知見を精査することに加え、日本語会話の談話・会話分析研究へ資することができると思われる。

本研究では、まず、マレーシア語の談話小辞 *kan* を考察対象に、当該要素が複数の機能と多義性を持つことに注目し、その多義性を獲得する意味拡張経路の仮説を記述する。*kan* は、共時的には様々な意味・機能を有する。例えば“*Kan*～?” は、「～（ん）でしょう?」に相当する「確認要求」を意味する。また、平叙文や感嘆文を構成する“*Kan*～./!” は、「～でしょう./!’」に対応する「確認要求」の意味を持つ。また、文末に“～, *kan* ?” のように付加すると、「～よね?」に当たる「付加疑

問」の意味にもなる。更に、文中・文末に助詞“～*kan*, ～.”、“～*kan*.”として出現し、それぞれ日本語の「～ね/さ、～。」「～ね/さ。」に相当する意味も持つ。

マレーシア語会話では、話し手によって談話小辞 *kan* が発話された前後では、聞き手の反応があることが経験的に観察される。談話小辞 *kan* は、インフォーマルな会話場面において、話し手の相互行為的（間主観的）な態度を示すスタンス・マーカの1つであり、日本語のいわゆる間投助詞「ね」、「さ」と類似した機能を有していると考えられる（なお、本研究では「ね」、「さ」は基本的に同一の機能を持つと考え、その相違点を議論することは目的としない）。談話小辞 *kan* の機能獲得の過程に関する仮説を提示することで、談話小辞 *kan* と「*kan* 周辺での聞き手の反応の生起」との因果関係の有無について考察する（研究 I）。

考察の結果、*kan* は元々 *bukan* という「強調否定形式」（「～の（ん）ではない」）が形態的に縮約し、文法化した結果、現代語における多機能性を獲得したと主張する。①「強調否定形式」の“～*bukan*～.”、“*Bukan*～.”（「～の（ん）ではない」）、及び②「否定疑問形式」の“*Bukankah*～?”（「～の（ん）ではないか?」）が、まず、③「強調形式」の“*Bukankah* ～./!”（「～ではないですか。!/」）、及び④「Yes/No 疑問形式」の“～*atau bukan*?”の2方向に機能拡張したと仮定した。つまり、③「強調形式」の“*Bukankah* ～./!”（「～ではないですか。!/」）、を獲得した方向と、④「Yes/No 疑問形式」の“～*atau bukan*?”（「～ですか、それとも違いますか?」）、⑤「確認要求形式」の“～, *bukan*?”（「～よね?/ね?」）を獲得した方向である。次に、⑤「確認要求形式」の“～, *bukan*?”（「～よね?/ね?」）から、2方向に機能拡張したと仮定した。つまり、⑥「共感表示形式」の“～*bukan*./!”（「～よね。!/」）を獲得した方向と⑦「傾聴要求形式」の“～*kan*, ～.”、“～*kan*.”（「～ね/さ、～」、「～ね/さ。」）を獲得した方向である。更に、②～⑦のそれぞれの形式の内部で生起位置の変化、形態的縮約などの変化が起こったと推定した（以下の図参照）。



先の仮説の妥当性を有する根拠としては、コーパスによる部分的な通時的妥当性、機能拡張の内的必然性の観点からの妥当性、他言語との並行現象からの妥当性を挙げた。

次に、マレーシア語・日本語会話（それぞれ女子大学生の友人2者間会話）における聞き手の反応の対照分析を行なう（研究 II）。

「分析・考察1」では、マレーシア語の小辞 *kan*、及び類似した意味・機能を持つと考えられる、日本語の談話小辞（いわゆる間投助詞）「ね」、「さ」の発話周辺での、聞き手の反応の量的分析（生起頻度）及び、質的分析（生起環境、生起要因、及び2言語間の聞き手行動の形態上の相違点）を行う。更にこれらの分析を通して得られた、談話小辞 *kan* 及び「ね」、「さ」の機能についての知見を述べる。

まず、マレーシア語会話において、話し手によって発せられた *kan* 周辺における、聞き手の反応の有無を分析した。その結果、*kan* は様々な統語的要素（主語、述語、連用修飾語、接続語、接続節、文他）に後接するが、特に「文」に後接するものが高い割合（61%）を占めていた。

そこで、「文+*kan*」という形式に焦点を絞り、その周辺の聞き手の反応の特徴を分析した結果、聞き手の反応はその生起位置によって、反応の種類が異なっていた。つまり、「文+*kan*」の「文」（文の最後まで又は途中まで）を聞いてから発される聞き手の反応は、うなずき（非言語行動）でなされる一方、「文+*kan*」の *kan* を聞いてなされる反応は、「あいづち」や「あいづち以外の言語的反応」が多数をしめていた。このことから、話し手の発話が進行している時、それへの聞き手による言語的反応は、発話を妨害する可能性を述べた。

また、聞き手が「質問」、「意見・感情」などの「あいづち以外の言語的反応」を表す場合は、*kan* を聞いてから聞き手の反応が始まっていることを示した。このことは、話し手は「文+*kan*」というフォーマットを使用することで、話し手自身の発話の「区切り」を明示し、聞き手がなんらかの反応をすることが可能になったことを示している可能性があることを述べた。

一方、話し手による「文+*kan*」の発話後、聞き手の反応がないこともあった（35%）。その場合、*kan* の機能が「傾聴要求」であること、またそれに対する聞き手の反応は、「明示的傾聴表示」（あいづち、うなずき）或いは「非明示的傾聴表示」（注視、注目行動）であり、*kan* の発話環境や聞き手の話を聞く態度といった変数によって、そのどちらかが選択されると結論づけた。

次に、日本語会話において、話し手によって発せられた「ね」、「さ」周辺における、聞き手の反応の有無を分析した。まず、「ね」、「さ」は様々な統語的要素（接続語、連用修飾語、主語、フィラー、主題、連体修飾語、文、目的語、述語、他）に後接するが、特に「文+接続語」、「連用修飾語」に後接するものが高い割合を占めていた（約47%）。

話し手による「ね」、「さ」の発話周辺の、聞き手の反応率は59%で、無反応(34%)よりも多かった。

会話の質的分析を通して、話し手は発話に「ね」、「さ」を付加することで、聞き手の傾聴姿勢を要請している（「傾聴要求」機能）ことを主張した。またそれに対する聞き手の反応は、「明示的傾聴表示」（あいづち、うなずき）或いは「非明示的傾聴表示」（注視、注目行動）であり、「ね」、「さ」の発話環境や聞き手の話を聞く態度といった変数によって、そのどちらかが選択されるとした。この機能は、*kan* のそれと共通していることを述べた。

次に、「分析・考察2」では、「分析・考察1」の環境以外で出現した、聞き手の反応（あいづち、うなずき）の質的分析を行い、その出現（又は非出現）環境について詳述する。

具体的には、両言語話者の聞き手としての反応が生起する環境として、(1)話し手の発話の「区切り」付近、(2)話し手の発話に長音化、イントネーションの上昇がみられた後、(3)話し手に、言い淀み、ポーズなどの「トラブル源」が発生した後、(4)話し手の発話内容への「支持」、があることを、実証的に示した。とりわけ、(4)については、マレーシア語・日本語両会話において、聞き手が話し手への「支持」、「同意」を示す際に、話し手の発話が継続しているまさにその最中にあいづち、うなず

きが生起していることが示された。しかし、その形態は異なっており、マレーシア語会話においては、専ら継続した複数回のうなずきによって、日本語会話では反復型あいづち（「うん」）とそれに同期するうなずきによって、実現されることが多いという相違点があることが示された。その相違の要因は、「分析・考察1」で既に述べたように、「話し手の発話に、聞き手の発話が音声的に重複する」ことへの志向の差によると結論づけた。

次に、聞き手の反応が生起しない環境は、マレーシア語会話においては、「理解に問題がある」場合、日本語会話においては、「意見への不同意」、「トピックとして扱うことへの不同意」が示された。

最後に、マレーシア人留学生とその友人の日本人大学生の、日本語接触場面会話及びフォローアップ・インタビュー（FI）の分析を行った（研究III）。その結果、マレーシア人と日本人の「規範」の相違、及び聞き手行動（あいづち、うなずき）の性質の相違による影響があることを示した。

まず、「日本人大学生が抱いたマレーシア人留学生への違和感」は、「聞き手としての反応の欠如（あいづちの少なさ）」及び「あいづちの長さが長い」という「あいづちの不適切な使用」にあった。

次に、マレーシア人留学生の「規範」には、「相手の言語規範の解釈よりも、相手の反応の意味を自分の言語規範に基づいて解釈し、ある言語行動を行う又は行わないことを選択する」や、「積極的に会話を進行調整する言語ホストと消極的に会話に参加する言語ゲストの存在の容認」（(1)自分の言語行動への無関心及び気づきのなさ、(2)他者依存）があることが示された。これらの規範は、あいづちの規範からの逸脱の要因となっていたり、あるいは、「逸脱」への「留意」・「調整」の不実施の要因の1つとなっていたりした。

加えて、マレーシア人留学生の「逸脱」に対して、日本人大学生は「評価」を行わず、そのため、マレーシア人留学生は、その「逸脱」には気がつかず（「留意」せず）、「調整」を行わなかったことを示した。

また、両話者間の聞き手行動（あいづち、うなずき）の性質の相違、及び、マレーシア人日本語学習者の母語の転移（あいづち、うなずき）によって、日本人の「違和感」が起こっていることを示した。結論として、中上・上級レベルのマレーシア人に対する会話教育への示唆として、「あいづちの不適切な使用」という現象に目を向ける必要性を述べた。